

開講計画 全9回／各90分

回	日付	曜日	10:30～12:00
1	4/15	水	歎く、夕霧の正妻・雲居の雁
2	5/13	水	小野へ恋文を書く、夕霧
3	5/27	水	亡き御息所、四十九日の法要
4	6/10	水	女二の宮、小野から一条の宮へ帰る
5	6/24	水	女二の宮、夕霧を避けて塗籠(ぬりごめ)の部屋に隠れる
6	7/8	水	夕霧の正妻・雲居の雁の嫉妬
7	7/22	水	侍女に導かれ、塗籠に入る夕霧
8	8/5	水	雲居の雁、憤慨して実家へ帰るも、父大臣の穏やかな対応
9	8/26	水	夕霧の家庭の一波乱の、収束する様子

受講料 15,000円(教材費別)

定員 35名

生真面目な夕霧なのに、大胆に、友人の未亡人に恋してしまう

本巻は、源氏の息子・夕霧が生真面目(きまじめ)なのに、友人の未亡人・女二の宮の精神性に惚れ込んでしまう物語です。女二の宮が、高貴でしかも優しい皇女だったからです。

女二の宮は、母の法要を済ませ、小野から一条の宮へ帰ります。弔問する夕霧に迫られ、女二の宮は、塗籠の部屋にまで逃げます。夕霧の正妻・雲居の雁は、幼友達で、耳はさみして家事を切り回す賢妻で、浮気しない夫に安心していました。しかし今は、夕霧は、不器用ながらも女二の宮に夢中で、侍女に助けられて、思いを遂げます。

夕霧の家庭騒動は、鬚(ひげ)黒の家庭とは正反対でした。夕霧の正妻・雲居の雁の実家は、機転を利かして、丸く収めます。正妻の父・致仕の大臣の、度量の大きさによります。一方、鬚黒は源氏の養女・玉鬘を迎えたので、一緒に住んでいた正妻は憤慨(ふんがい)して実家に帰ってしまいます。気位の高い正妻の父・式部卿の宮が、世間体をはばかったからです。

講師

本学名誉教授

うめの こ

梅野 きみ子

テキスト・教材

- ①宮内庁書陵部蔵青表紙本『源氏物語 夕霧』
編者 神作光一 新典社 1,870円(税込)
- ②仮名変体集 編者 伊地知鐵男 新典社 385円(税込)

①は必須、②は任意、令和7年度後期開講の受講生は、その時使用したテキストを使いますので、購入は不要です。

受講上の注意、受講日に持参するもの等

初回、教室にてプリントを配付し、同時にテキストの販売をします。
講座申込み時に注文して下さい。テキスト以外に、他の本の持ち込みも自由です。